

義烈 遊擊戰士

桐 編  
常 末

## 目次

鹿沼姿郎の手記	11
被差別部落	11
空手道	13
穢多と言われて	19
部落民の少女	23
貧しさ	27
差別と濡れ衣	34
傷ついた少年の心	42
昇級審査	54
崩れた友情	59
差別への勇氣	62
差別への怒りと悲しみ	68
部落の長欠児	81
黒帯への挑戦	84
怒りの鉄槌	95
二良崎の歴史	102
差別授業と破戒	111

部落民宣言	115
差別への闘い	120
水平社宣言	123
怒りの炎	131
敗北の悔しさ	134
屠場への決心	140
卒業と就職差別	144
荊冠旗と部落開放会	147
屠場労働	153
二度目の空手道大会	155
結婚差別	163
引き裂かれた愛	171
差別戒名	176
最後の空手道大会	183
激闘	188
徴兵検査	192
召集令状	195
入隊	197
甲種幹部候補生	200

陸軍予備士官学校	203
秘密戦士採用試験	205
陸軍中野学校	210
秘密戦教育	213
松影島分校	217
遊撃戦教育	220
遊撃戦士	227
退校	231
一式陸攻搭乗	236
ガダルカナル島上陸	241
密林迂回作戦	246
総攻撃	250
撤退	259
野戦病院	263
ガ島 決戦計画	272
遊撃戦	275
狙撃	282
小高い丘	289
零戦奪回	293

奇跡の再会	297
高砂義勇兵	302
川上清彦の回想	307
秘境	309
死の知らせ	314
パパア人との別れ	318
禁断	320
ギルワの死闘	329
南海支隊の終局	334
遊撃戦情報隊	336
陸軍病院	342
ラバウル探索	344
ラバウル航空隊	348
戦友らとの別れ	354
マニラへ	358
大東亜共栄圏の叫び	361
マカピリ	368
抗日ゲリラの影	370
エメラートンヤ家	373

悲しみのマカピリ	377
ゲリラの暴挙	379
黒マスク	383
討伐隊の虐殺	385
甲斐原王道	393
義烈愛国空挺隊	397
万朶隊	401
飛行戦隊	403
斬り込隊出撃	407
敵機の脅威	412
ブラウエン強襲	417
レイテ島脱出	422
グラマン撃墜	428
富永軍司令官の小刀	432
飛行戦隊と屠竜	436
米軍操縦士	440
無断改造	442
殉義屠隊	444
人間機雷	448

マカピリ発足式	451
偽装病院船	453
神風神雷隊	460
桜花の全貌	465
桜花連絡	469
悲しみの一式陸攻	474
漂流と回想	481
サムル島	486
マルレ	490
スアルへ	495
単独出撃	497
リンガエン湾の戦い	500
さよなら野口	507
イントラムロス	509
フィリピン少年	513
マニラ市街戦	516
米軍の猛攻	521
マニラ脱出	525
バギオへ	533

イリサン戦車特攻	535
軽戦車長	539
マレーの虎	542
リカルテ將軍	545
イゴロット族	548
密林の洞窟	551
マッカーサーのメッセージ	554
マカピリとの別れ	556
敗戦の事実	559
カール大佐	562
カンルバン収容所	565
戦犯容疑	568
過去の虐殺	571
憲兵長との再会	576
マンダルヨン収容所	581
戦犯弁護人	584
最悪の軍事法廷	587
運命の審判	594
戦犯死刑囚	598



村上大尉との訣別	600
浜常先生	602
プレシーラ	604
無罪に向かつて	609
最後のフィリピン	611
祖国日本	615
はじめに	619
サムル島	621
帰国	628
西條	637
高砂族の回想	645
再びフィリピン	655
鹿沼の戦友	664
ニューギニア行きのメンバー	673
終局の旅路	682
エピソード	686



## 鹿沼姿郎の手記

### 被差別部落

私が生まれたのは大正十年九月七日、高知県麻郷村にある二良崎にらぎまきという地区でした。高知市の中心部からは、西へ四十キロ程離れた村でした。

この村は山々に囲まれ、川も流れ、少し歩けば海も近く、自然豊かな村だったので。幼い頃の私達にとっては、遊び場には欠くことのない村でした。しかし幼い頃はほとんど二良崎の地区内で遊んでいました。

当時、私が幼い頃から両親らは、「麻郷村までいいが、二良崎のことはいうな」「とにかく二良崎のことは隠せ」「ムラから出たら、絶対に出身を隠せ」というようなことをいっていました。ムラというのはこの二良崎地区のことで、地区内の人間は皆、当時はムラといていたのです。

自分も当時、子供心に、「何でやろ?」「自分のムラは、他の地区と比べると変やな」と思いながら、両親に訊い

ても、「大きくなったら分かる」などといって逃げるのです。

それも当然といえば当然なのです。当の両親もろくに教育を受けておらず、部落差別の歴史すら知らないのです。そんな中で、とても正しい答えなど出てくるはずがありません。当時のムラの人達は、他の地区の人達と比べると貧しい人達ばかりで、文字の読み書きがほとんどできない人達も多くいたのです。

そんな私のもっとも幼い頃の記憶は分教場へ通いはじめた頃からです。初めての学習でした。

分教場とは小学校と同様なもので、明治五年の学制が発令され、小学校を作れという奨励された時代に、恐らく部落民らとは一緒に教育は受けられないという考えで、この二良崎にも作られたようです。しかし、この二良崎の分教場は一年生と二年生の間だけで、三年生になると本校の小学校へ通学しなければなりません。そんな訳で、私も二年間、この二良崎の分教場へ通うことになりました。

私の家からは子供の足で歩いて、十五、六分位の場所に、その分教場がありました。通ってくる子供達は皆、ここの二良崎のムラの子供ばかりでしたので、顔もよく

知った兄弟みたいなものでした。勉強しに行くというよりは、友達と遊びに行っていたようなものです。あまり勉強をしたという記憶は、私には残っていません。

眼鏡をかけ、太った男の先生が、二年間教えてくれました。確か名前は、石田先生だったと思います。クラスは一クラスだけで、多い時は五十人位生徒がいました。その石田先生が用事でこれない時は、別の先生が何人か来ていたようでした。

あまり石田先生に怒られた記憶はないのですが、とても声の大きかった事が印象に残っています。友達が授業中に怒られた時、先生の怒鳴り声で、教室が割れるかと思ったことがあります。

二良崎の分教場での二年間が過ぎると、本校である秋月小学校へ通学しなければなりません。分教場ではムラの友達ばかりでしたけれど、本校では他の地区の生徒も一緒になるのです。

「妾郎、明日から数幸と本校やな。誰にも敗けんように頑張れ」

明日から本校へ登校する前の晩、父が晩酌をしながら私にいました。父の横で私ら家族は夕食をとっていました。私がムラから出るのを両親らはかなり心配してい

たようです。今までムラ以外の子供と、私は一度も遊んだことがなかったのです。

私の家族は両親二人と、長男の友矢、次男の数幸、三男の私、五人の家族でした。

父は当時、土方の請負業をやっており、長男の友矢もそれを手伝い、他に二良崎地区の人間も数人、雇っていました。父は土方の親方だったのです。

母は祖父母の営んでいる屠場とじょうへ、手伝いに行っていました。二良崎は江戸時代まで農業のかたわら、死牛馬の処理を担い、皮を剥いでなめし、それで丈夫な革を作り、そして、その後に残った肉を食べていました。祖父母の屠場も、その頃からやっているとは聞きませんでした。

屠場での仕事は牛馬の解体作業で、大きなノコギリや庖丁、ナイフを使用し、土方と同様な、かなりきつい肉体労働のようでした。祖父母以外にも、父の兄弟などが手伝って働いていました。

母や祖母は、解体されたそれらの内臓の処理をしているようでした。うちの食卓には、母が持ち帰ったそれらの料理がよく出されたのです。一般の人があまり食べない部分を、独特な料理方法で食卓に並んでいました。

“ミノ煮” “ブクの天ぷら” “あぶらかす” “さいぼし”

空手道

ミノ煮とは、野菜と牛の胃をしょうゆで煮ただけのもの。昔は砂糖が高価だったので、入れなかった。今のすき焼きとは、そこが違うし、身の厚い部々は商品になるので、余ったペラペラのかたい部々ばかりを食べた。

フクの天ぷらとは、牛の肺臓をスライスして天ぷらにしたもの。あぶらかすとは、牛の腸を炒り揚げた単純なもの。さいぼしとは、薄くスライスした牛馬肉片に塩をすり込み、天日干したものだ。ビーフジャーキと似ている。いずれも差別と貧困の中で培った、私達ムラの食べ方でした。

一度母のいる屠場へ迎えに行つた時のことでした。私は外からソツと中を覗き込み、母を捜そうとしました。すると床には、血まみれになった牛の顔はあるし、目玉も転がっている状態で、私は気味が悪くなって家へ走って帰りました。それからしばらくの間、屠場へ近付くのはやめました。現在の屠場では衛生管理もしっかりとなされ、このような光景は全くないと思います。

本校の秋月小学校に通学することになりました。最初の一年目は、六年生の兄の数幸と一緒にでしたが、二年目の四年生の時から、兄が卒業したため、二良崎の友人らと通つたりしていました。

ちょうど、そんな四年生になつたばかりの頃でした。私に一人の友人ができたのです。今までの私の友人は皆、二良崎のムラの少年ばかりで、クラス内で遊んだりする時も、ムラの仲間らと一緒にでした。他の地区の児童らは、お金持ちの家の子供らもあり、ムラの子供らとは着ている服装も違い、なかなか馴染めなかつたのです。

「鹿沼君」

学校の休み時間、教室で私に声を掛けてきました。

「何や?」

呼ばれて私は振り向くと、そこには私と同じ背恰好の少年が立っていたのです。彼の名前は徳大宏とくだいこう、麻郷の村営診療所の医者の子供であった。

「空手って知ってるか?」

徳大は突然、私にそんなことを訊いてきた。

「知らん、何やそれ?」

当時、空手は現在みたいにメジャーなものではなく、ほとんど一般的には知られてなかったのです。当然、私も知るはずがありません。見たことも聞いたこともないのです。

「これや、エイー！」

すると、また突然徳大は、今度は掛け声を発しながら、正拳突き、前蹴り、回し蹴り、横蹴りなど、様々な動きをし始めたのです。

「すげえな」

私は目を点にしながら、思わず呟つぶやきました。これが空手っていうものなのか？ そう考えながら、よくムラの友人らと取っ組み合いのケンカをしていたのを思い出したのです。私は当時から体が小さい方だったため、大きい相手とやる時は、いつもでこずっていました。これを身に付ければ、誰とケンカをしても敗けないな、と子供心に思いました。

私らの取っ組み合いでくり出すパンチャキックとは、スピードや形がまったく違っていたのです。一瞬にして、目の前の徳大少年に憧れてしまいました。

「どうや、これが空手や」

徳大は拳を握りしめたまま、正拳突きを私の鼻先でど

タツと止めた。

「すげえな」

私はまたいった。

「鹿沼君、僕と一緒にやらんか？」

「やるやる」

大きく頷うなづきながら、私は即座に返事をした。断わる理由などなかった。

「学校の近くに師範がいるんや」

「シハン？」

「空手を教えてくれる先生のことや。心拳館という空手の道場があるんや」

「本当か？」

「本当にやるんやったら、学校が終わったら僕についてきたらいい」

徳大はニコツと笑みを浮かべながら、そういった。

「行く行く」

また大きく頷うなづいていました。物凄く興味が沸き、私は興奮していたと思います。

学校が終わると、徳大に促されるようについ行きました。校門から出ると、二良崎とは反対方向へと歩を進め、

二人はとぼとぼと歩くのです。

「いつから、その空手はやってるの?」

歩きながら、私は徳大に尋ねた。

「二年になつてからや」

この時で、徳大は空手道の経験が既に二年あるということになる。本当にこの時、目の前の徳大がかつこよく見えた。

学校から十分程歩いた所で

「着いたよ鹿沼君、あそこが道場や」

と、徳大は指差した。

指差した方向に目を向けると、木造の粗末な小さな建物が見えた。その建物の入り口付近には、数人の人影も見える。こんな場所で、空手道というものが行われている事など、全く私は知らなかった。二良崎とは帰える方向も違ふし、普段からあまり、こつちの方へは来る事がなかったのです。

道場へ近付くに従つて、「心拳館」と書かれた木でできた立派な看板が目に入った。

「こんにちは、師範、友達鹿沼君です」

道場の入り口まで来ると、ドアの奥から若い男の人が出て来ました。そして徳大が、私のことを紹介したのです。

「はじめまして、ここで空手道を教えている杉川です。

よろしく」

杉川と名乗る、その若い男の人は笑みを浮かべながら、私に挨拶してくれました。

「あ、鹿沼姿郎といいます」

私は思わずどきまぎしながら、答えました。背恰好は普通の大人の男性とはあまり変わりませんでした。何か子供心に威圧感を感じました。表情は笑みを浮かべているけれど、瞳の鋭さが今でも印象に残っています。

服装は、当時では見たことのない恰好をしていたのです。道場に居た他の人達は、短パンの普段着の恰好でしたけど、杉川師範だけは上下白の道衣で、腰には黒い帯を締めていました。後になって知ったのですが、これが空手衣で、黒帯は有段者の印です。当時はまだ誰も空手衣など持っていなかったようでした。

これがこの先、私の空手道の師匠となる杉川師範との初対面でした。

「徳大と一緒に、今日からやつていくか?」

杉川師範が、私に問い掛けました。

「はい」

私は徳大の方をチラッと見て、答えました。その時でした。杉川師範の手に、目がいってしまったのです。

何と人指し指と中指の拳こぶしの部分が、大きなタコのようになって盛り上がっていたのです。右手も左手も同じように、これも後で分かったことなのですが、空手道の稽古で正拳突きなどで拳を鍛えるため、直接人指し指と中指の拳の部分が、拳立けんたてふせやマキワラの打ち込みなどが直接当たるため、タコのようになって大きく盛り上がるのです。

拳立てふせとは、腕立てふせは手の平を床に付けてやりますが、手の平ではなく直接拳を床に付けてやることを、拳立てふせといっていました。空手道は腕を鍛えると同時に、拳も鍛えなくてはなりません。

マキワラとは、これも拳を鍛えるためのもので、ある程度の長さの板の端の部分を地中に埋め、地上に出た胸の高さの位置の部分を拳で打ち込むのです。その部分には、ワラや布を巻いたりしていました。他にもマキワラの種類はありますし、拳を鍛える方法も幾つかありました。

とにかく空手道はボクシングなどとは違い、素手で格闘するわけですから、必然的に拳を強くする必要があります。ですから空手道の有段者らは皆、拳の盛り上がった人達ばかりです。

それから十五分程すると、稽古がどうやら始まったようでした。私らの後からも、数人がゾロゾロと道場内に入ってきて、熱気に包まれました。私達みたいな小学生から大人まで二、三十人はいたでしょうか。全員、男ばかりでした。

体をほぐす柔軟体操から始まり、私は徳大に習いながら行ないました。そして空手道の基本の突きや蹴りの稽古が始まり、徳大や横にいる人、または杉川師範の方をキョロキョロとしながら、見様見まねで私も体を動かしていたのです。

「上段横蹴り！ 気合い入れて！ 一！」

「エイ！」

「二！」

「エイ！」

「三！」

「エイ！」

杉川師範の号令に合わせ、道場生らは掛け声を発しながら、技わざをくり出していました。私は全く慣れていないため、体をフラフラさせながら必死でした。

すると杉川師範が横に来て、私の手足を押さえてくれて、技を正してくれました。私は緊張しなくなり、体はガ



チガチ、汗ダラダラ状態。一方徳大の方は慣れてるせいか、技がビシビシとカッコ良く決まっているのです。

「はい、力を抜いて」

杉川師範に背中を軽く叩かれ、私はいわれたのです。

一通り、その日の稽古が終わると、私はフラフラになり、やっと立っていました。

「鹿沼君、君は体がだいたい堅いようだね。体を軟らかくしないと、空手の基本の突きや蹴りが上手うまにならない。特に上段回し蹴りや上段横蹴りの時とか、足が上に上がらないだろう」

私がやっと立っていると、杉川師範がアドバイスをしてくれました。師範のいう通りだと思っただけです。私は確かに体が堅かった。体力的に慣れていなかったため、フラついたのも分かりませんが、第一体が堅いため、足が上からず、バランスを崩して体がフラついてしまうのです。

「そうですね」

私は考えながらコクリと頷いた。

「君にやる気があるなら、明日から毎日来なさい。君はまだ小学生だから、何も持ってこなくてよし！ 体一つできなさい」

杉川師範は私の目をじっと見ながら、優しく話し掛けるようにいうのでした。私はこの時、自分の心に誓った。  
『必ずやって強くなるぞ』

徳大と道場で別かれると、私は二良崎の自宅へ向かって走った。

「空手やるぞ！ エイ！」

帰り道、私は妙に嬉しくなり、道沿いの家の門扉に習ったばかりの正拳突きを一撃。

「ガシャン！」

鋭い音。幸い門扉は壊れはしませんでした、

「コラー！」

家の奥から怒鳴り声。

「すみません！」

大声で私は誤り、再び走って帰りました。

「あら、遅かったね。また道草くったのか」

家に着くなり、私の顔を見た母が呆れたようにいいました。私以外の家族の者は皆、既に帰っていたのです。今日の事の顛末てんまつを、家族全員に話しました。

「そんなものやらんでもよい。学校が終わったら真っ直ぐ家に帰って来て、ムラの友達らと遊んだらよい」

母は口を尖らせていました。この時、母は私が二良

崎の外で遊んだりする事を心配していたようです。我々部落民が、部落外の人間から差別されることを恐れていたのです。小学校の小さな私の心に傷付かないようにと、母は思ってくれていたのです。しかし当の私は、その頃、そんなことは全く分かりませんでした。

「良文君ヨシフミがいるやろ。良文君とはもう遊ばないのか？」

横にいた長男の友矢がいました。良文君とは、同じ二良崎の同級生で、幼い頃からの私の第一の親友でした。

「遊ばないことはない。でも、杉川師範と約束した」

私はいった。

「まあ、いいじゃないか。小学生の間にやりたい事は何でもやつとけ。大きくなったら働かないといけないから、やりたい事もできなくなるぞ」

横でジツと話を聞いていた父が、私の事を庇かばうようにいつてくれました。

「その空手というのを俺にも教えてくれ」

今度は次男の数幸がいました。

「数兄かずにいには無理や、稽古はかなりきついで」

次男のことを、私は数兄と呼んでいました。からかい気味にいうので、私はムツとしていったのです。

「しかし、先生にそうやって教えてもらうのだったら、

月謝を払わないといけないだろう」

父は母に目を向けました。

「杉川師範は何もいらなといった。小学生だから、体一つでこいといったんだ」

私は杉川師範の言葉を思い出した。うちは貧乏だったので、高い月謝など払えない。両親らも、それを心配しているようだ。しかしこれから先も、月謝など一度も持つて行った記憶が私にはない。

当時小学生の頃、私が空手を習っていた時期、杉川師範が普段どんな生活をしていたのか、全く知りませんでした。空手着を着て、私達道場生に稽古をつけてくれる姿しか、私は見たことがなかったのです。空手を商売にしているようには見えませんでした。

翌日から学校が終ると、道場通いの日々が続きました。徳大と一緒に、空手道の稽古にはげみました。道場の壁には道場生の名前の書かれた札が、順番に掛けられていたのです。

「あ、僕の名前や」

私は自分の名前の書かれている札を初めて目にすると、それを指差して徳大にいったのです。

「ほんまや、これで鹿沼君も同じ心拳館の道場生や」

徳大は笑みを浮かべていってくれました。私の札は一番右端にあり、徳大の札は左端近くにありました。これは道場に入門した古い順に、左端からくるそうで、一番新しい私は右端だったのです。

稽古はきつく、決して楽ではありませんでした。しかし私は空手道の虜になり、稽古には毎日通いました。強さへの憧れだったのです。徳大が稽古に行かない日でも、私は一人道場に通いました。道場には出席ノートがあり、稽古に来た者は名前を書くようになっていたのです。そこには毎日、「鹿沼姿郎」と書いた私の名前がありました。時々、杉川師範も用事か何かで道場に姿を見せない時がありました。その時は自主稽古ということで、各自の稽古になるのです。

その時は、私はひたすらマキワラを突いて拳を鍛えていたのです。そのマキワラは、師範が背の低い小学生の私らのために作ってくれたものでした。道場内にある壁掛けマキワラや、外にあるマキワラなどは大人用で、拳を突く位置が違います。私たちのマキワラは、道場の裏にある杉の木に直接作られていました。

ある雨の日の自主稽古の時、私の突くマキワラは外にあるため、私はビシヨ濡れになりながら杉の木と格闘し

ていました。雨が降るものだから、誰も稽古には来ていませんでした。私一人、雨の中マキワラを突いていたのです。一心不乱に突いて突きまくりました。

その日の稽古を終えて家に帰ると、びしょ濡れになった私の姿を見た母は、酷く驚いた様子でした。

「どうしたの？ そんなに濡れて……」

穢多と言われて

あれは忘れもしません。私が四年生の頃。六月の梅雨の晴れ間。十日間位降り続いた雨も上がり、前日からの厳しい暑さでした。

私は普段、親友の小村良文と登校していました。家も近所で、彼とは幼い頃からの大親友でした。しかし、その日に限って私は朝、寝過ごしてしまったのです。

「姿郎！」

家の外から、私を呼ぶ大きな声がありました。小村の声でした。普段、互いの家に呼びに行くようなことはあまりしませんが、いつもの時間になっても、私の姿が見えないもので、気になって呼びに来たのでしょう。

「ごめん、今、起きたばかりや」

私は表に出て、小村にいました。起きて、ちょうど顔を洗おうとしていたところでした。

「何やっているのだ。遅刻せんように早くこい」

「わかった、わかった、ごめん、先に行つててくれ」

「早くこいよ」

私は至急、顔を洗い、朝食もそこそこにして家を飛び出しました。当然、家の周辺には小村の姿もなく、他の小学生らの姿もありませんでした。

走つて学校へ向いました。朝から日差しが強く、走り始めると直ぐに、体中汗でびしょびしょです。喉も渴きはじめたのです。しかし、走つて行かなくては遅刻になります。

二良崎を過ぎた頃、もう喉の渴きも限界に近付き、何処かで水を飲もうと思つたのです。周辺をキョロキョロしながら走っていると、よその家の井戸水が目にはいつたのです。

ここで飲んでから、また走つて行けばいい、そう考えました。道から家の敷地内が見え、その奥に井戸が見えました。

「すみませーん！」

いくら何でも勝手に入つて飲むのはまずいだらうと子供ながらに思い、外から声を掛けてみたのです。しかし

待つても、返事がないのです。学校には早く行かないといけないし、このままだと喉が渴いたままでは走れない。

水ぐらい少しだけ飲ませてもらつても、かまわないだろうと思つと、私は井戸の方へと歩を進めたのです。

近付くと、綺麗な透き通つた水があります。手で、その水をすくつて口にしました。ひんやりとした感じ、私は二、三杯飲みました。

「こら、そこで水を飲んでるのは誰や！」

突然、私の背後から男の人の声が聞こえたのです。思わずドキツとしてしまいました。

「す、すみません」

とりあえず謝りながら、私は振り返りました。するとそこには、つるつ禿げの老人が立っていたのです。少し恐そうな表情に見えました。

「どうしても喉が渴いて……走つて学校に行く途中で……」

私は言い訳をした。何だか、この老人が怒っているように思えたからです。

「そりゃ走つたら喉が渴くやろ、今日は暑いもんな」